カミュ、フランセ・ダルジェリ
―『最初の人間』にみるアラブ人との共存の夢 ―

松本　陽正

構成

Ⅰ. 祖国とアイデンティティー
(1) カミュの祖国とアイデンティティー
(2) 『最初の人間』の主人公ジャックの祖国とアイデンティティー
Ⅱ. アラブ人との共存の夢
(1) 『最初の人間』以前の作品におけるアラブ人
(2) 『最初の人間』におけるアラブ人
(3) 『最初の人間』の今後の展開におけるアラブ人
(4) アラブ人との共存の希求

Ⅰ. 祖国とアイデンティティー

(1) カミュの祖国とアイデンティティー

まず、基本的なことの確認から始めたい。カミュは 1913 年 11 月 7 日フランス領アルジェリアに生まれた。そして、「パリ・ソワール」紙に職を得て、1940 年 3 月 14 日アルジェリアを離れる。その後は、一時期オランで過ごすこともあるが、主にフランスで生活し、1960 年 1 月 4 日フランスで交通事故死する。つまり、26 歳までは主としてアルジェリアで過ごした後、46 歳までの約 20 年間は大半をフランスで過ごしている。そんなカミュにとっての祖国とは、どこだろうか？

1950 年末と推定される『手帖』の中に、「私にはフランス語という祖国がある」(*ŒC*, IV, 1099) との有名な言葉をカミュは残している。だが、もう少しこれを限定できないだろうか？　『カミュ辞典』の「祖国」の項目によれば、1943 年 7 月の『ドイツ人の友への手紙』(「第一の手紙」) において初めて、カミュは「祖国」の概念を抱き、フランスを祖国として認識するようになる [1)]。事実、「第一の手紙」には、「私の国」« mon pays » (*ŒC*, II, 9, 10) がフランスを指す記述が見つかるし、「第一の手紙」の最後には、« J'appartiens à une nation […] »（「私は以下のような国に属している」）(*ŒC*, II, 13) の繰り返しによって、フランスへの帰属意識が主張されている。ただ、ここで言う「フランス」には、当然のこととして、フランス領アルジェリア

が含まれることに留意しておく必要があろう。「第三の手紙」（1944 年 4 月）になると、祖国の概念はヨーロッパへと拡大し、ヨーロッパを「私の最大の祖国」« ma plus grande patrie » (*ŒC*, II, 23) とする記述が出てくる [2)]。

しかし、いずれにせよ、『ドイツ人の友への手紙』は独軍占領下というきわめて特殊な状況下で書かれたものであり、「イタリア語版への序文」によれば、「時代に密着した著作」 (*ŒC*, II, 7) であり、「暴力に対する闘争の記録」(*ŒC*, II, 8) なのである。レジスタンスに参加するカミュにとって、フランスを祖国と見る考えは、反ナチの意識から生まれたものであり、祖国の概念は、「人間を無意味なものとするものに対する、人間の共通の闘いに基づくもの」である以上、すなわち反ナチという「個々人の連帯」に基づくものである以上、祖国の概念がヨーロッパへと拡大しても、そこに何の矛盾もないわけだ [3)]。ただ、いずれにしても、祖国の概念は、「歴史」とのかかわりによって生まれたものであり、カミュはもともと祖国の概念を持ち合わせてはいなかったことを繰り返し述べておきたい。

1944 年 8 月 25 日のパリ解放、そしてナチという絶対悪の消滅、さらにはカミュの政治参加からの相対的な離脱、さらにはまた、自らの源泉への回帰願望の増大とともに、祖国の概念は変質をきたしてくる。よく言われるように、『夏』所収の「過去のない街のための小案内」には、アルジェリアを「私の真の祖国」« ma vraie patrie » (*ŒC*, III, 596) とする記述が出てくる。ところで、「過去のない街のための小案内」の最後には、「1947 年」という日付が記されている。月まで特定することは現段階では不可能だったが、この日付は重要だ。というのも、カミュが「コンバ」紙の編集長を辞するのは、1947 年 6 月 3 日だが、「コンバ」紙を離れる前、あるいは離れた後のカミュにとって、「祖国」とは、フランスではなく、フランス領アルジェリアの地に限定されてくるからである [4)]。

そして、次第にカミュは、自己のアイデンティティーを単にフランセ（フランス人）としてではなく、フランセ・ダルジェリ（アルジェリアのフランス人）と規定するようになる。1957 年 10 月 17 日、ノーベル文学賞受賞を祝うガリマール社でのカクテルパーティーの席で、カミュ自身、スウェーデン大使に次のように言うことになる。

> Je vous remercie et vous prie de transmettre mes remerciements à l'Académie royale de Suède qui a bien voulu distinguer d'abord mon pays et ensuite <u>un Français d'Algérie</u>.[5)]

翌 18 日にも、「フラン＝ティルール」紙に、自己を「フランセ・ダルジェリの作家」« un écrivain français d'Algérie » (*ŒC*, IV, 272) と規定する一文を寄せている。

よく言われるように、『時事論集第三巻 ― アルジェリアの記録』の「まえがき」の最終パラグラフには、アルジェリアをフランセ・ダルジェリ（民族）の「生来の祖国」« sa patrie naturelle » (*ŒC*, IV, 305) とする記述が出てくる。「まえがき」には「1958 年 3-4 月」という日付が打たれているが、それでは、その翌年の 1959 年に書かれた自伝的作品『最初の人間』には、祖国に対する思いや主人公のアイデンティティーは、どのように描き出されているのだろうか？

(2) 『最初の人間』の主人公ジャックの祖国とアイデンティティー

『最初の人間』は、1953 年に着想が得られ 1959 年に書かれた。タイトルにある「最初の人間」« premier homme » について、1954 年 3 月、フランク・ジョットランのインタビューに答えて、カミュは次のように打ち明けていた。

> J'imagine donc un « premier homme » qui part à zéro, qui ne sait ni lire, ni écrire, qui n'a ni morale, ni religion. [6)]

作家が自己の作品の最良の批評家とは限らないが、『最初の人間』を読むとき、カミュが明確に定義づけていたと首肯される。カミュの言うように、「最初の人間」とは、「道徳」や「宗教」といった既成の価値、バックボーンとなるもの、父なるものを持たずに、「ゼロから出発」し、独力で未来を切り拓いていかねばならぬ存在を指している。「道徳」や「宗教」が例としてあげられているが、その他にも、「歴史」「伝統」「先祖」それに「祖国」といったものとも無縁な存在であることは言うまでもない。リセで知り合ったフランセ・ドゥ・フランス（フランスのフランス人）のディディエはフランスを「ぼくたちの祖国」と呼ぶのに対し、ジャックは「祖国」の概念を持ちあわせてはいない。

> Quand il [=Didier] parlait de la France, il disait « notre patrie » et acceptait d'avance les sacrifices que cette patrie pouvait demander (« ton père est mort pour la patrie », disait-il à Jacques…), alors que <u>cette notion de patrie était vide de sens pour Jacques</u>, qui savait qu'il était français, que cela entraînait un certain nombre de devoirs, mais pour qui la France était une absente […] (*ŒC*, IV, 866)

この引用文で、ディディエは、「君のお父さんは祖国のために死んだんだ」« […] ton père est mort pour la patrie » と言っているが、『最初の人間』では、« mourir » ではなく、« être tué » が多用されており、ジャックの父に関して用いられている動詞 « tuer » が、重い響きで伝わってくる。もちろん、« être tué » が「戦死する」というのはごく普通の表現だし、たとえば、ロジェ・グルニエも、« […] il [=Camus] n'a pas connu son père qui a été tué à la bataille de la Marne; »（「マルヌの戦いで戦死した父をカミュは知らなかった」）[7] と述べている。

しかし、『裏と表』(1937) における父に関する 2 度の短い言及の中には父の死に触れた箇所が 3 つ見つかるが、そのいずれもで « mourir » が用いられていたのであった。

> Émancipée par le mariage, celle-ci est docilement revenue, son mari mort. Il était mort au champ d'honneur, comme on dit. (*ŒC*, I, 49)

> « Bien sûr, tu ne l'as [=ton père] pas connu. Tu avais six mois quand il est mort. » (*ŒC*, I, 53)

それに対し、先ほども述べたように、『最初の人間』では « être tué » が多用されることになる[8]。もちろん、普通に解釈してよい用例もあるが[9]、『最初の人間』の欄外の記述には次のようなものが見つかる。

> Il n'avait jamais vu la France. Il la vit et fut tué. (*ŒC*, IV, 780)

この « être tué » には、「戦死する」という意味の他に、「殺される」という第一義的な意味が強く含意されてはいないだろうか？

同じ内容のもう少し長い文が、「黄色い手帖」に残されている。父が « tuer » されたとする意識がカミュの内に強く巣くっていたことが窺える。

> Mobilisation. Quand mon père fut appelé sous les drapeaux, il n'avait jamais vu la France. Il la vit et fut tué. *[Croix en marge.]*
> (Ce qu'une humble famille comme la mienne a donné à la France.) (*ŒC*, IV, 922)

さらには、受動態ではなく、戦争を主語とした能動態の例が、本文中にも「黄色

い手帖」にも見つかる。

> [...] comme était mort son père dans une incompréhensible tragédie loin de sa patrie de chair, après une vie tout entière involontaire depuis l'orphelinat jusqu'à l'hôpital en passant par le mariage inévitable, une vie qui s'était construite autour de lui, malgré lui, jusqu'à ce que la guerre le tue et l'enterre […] (*ŒC*, IV, 859)

> La vie de L.C. Tout entière involontaire sauf sa volonté d'être et de persister. Orphelinat. Ouvrier agricole. Obligé d'épouser sa femme. Sa vie qui se construit ainsi malgré lui — et puis la guerre le tue. *[Croix en marge.]* (*ŒC*, IV, 942)

「戦争が彼を殺す」 « [...] la guerre le tue [...] » というこの表現からは、フランスの犠牲となったとする意識は感じとれても、フランスを祖国とする意識などまったく伝わってはこず、フランスに対する反感すら聞こえてくるようだ[10)]。

自伝的作品『最初の人間』は、主人公ジャック 14 歳、リセ時代の途中で終わっているが、1943 年になって初めて「祖国」の概念を抱くようになるカミュ同様、主人公の少年ジャックには、「祖国」は存在しない。あえて言えば、「最初の人間」たる少年ジャックの生きる地はアルジェリアであり、彼のアイデンティティーはフランセ・ダルジェリだと言えよう。

だが、ジャックの生きるフランス領アルジェリア、そこにはアラブ人もいた。では、アラブ人はカミュの作品でどのように描かれているのだろうか？

Ⅱ．アラブ人との共存の夢

(1)『最初の人間』以前の作品におけるアラブ人

アラブ人は、カミュの作品において語られていなかったわけではないが、「父」とともに顕在化していなかった大きなテーマの一つである。

アラブ人については、『最初の人間』への序曲ともいえる『追放と王国』所収の『口をつぐむ人びと』の樽職人サイドを別にすれば、生前刊行されたカミュのすべての作品で名がつけられてはいなかった。たとえばオブライエンは、アラブ人の無名性にカミュの差別意識を見ているが[11)]、しかしながら、たとえば『異邦人』においては、フランス人に対してでも名前で呼ぶのを極端に避け、必要最小限の人物にしか名前をつけていない点から、名付けぬことでむしろ古典的な簡潔さを目指したと考えるべきだろう。また、『異邦人』や『ペスト』では、二義的な作中人物の無名性に

よって、ある種の効果を狙ってもいた[12)]。

『異邦人』については、その他にも理由があるのではなかろうか？『異邦人』の第一部第 1 章を読むとき、顔に出来物があり、目の下をぐるりと包帯でまいている死体安置所のアラブ人看護婦の次のような記述から、不気味な印象を受ける読者も多いのではないだろうか？

> Près de la bière, il y avait une infirmière arabe en sarrau blanc, un foulard de couleur vive sur la tête. […] À ce moment, le concierge m'a dit : « C'est un chancre qu'elle a. » Comme je ne comprenais pas, j'ai regardé l'infirmière et j'ai vu qu'elle portait sous les yeux un bandeau qui faisait le tour de la tête. À la hauteur du nez, le bandeau était plat. On ne voyait que la blancheur du bandeau dans son visage. (*ŒC*, I, 143)

だが、そこにアラブ人に対するカミュの恐怖感や嫌悪感を見るのは間違っている。『異邦人』という芸術作品は、実体験やさまざまな見聞をもとに創造された側面があることを忘れてはなるまい。この記述にしても、実体験のメモをもとにしたものだった。すなわち、1938 年 5 月、兄リュシアンの妻の祖母の葬儀ためマランゴの養老院を訪れた折の次のメモを元にしているのであった[13)]。

> L'infirmière mauresque qui cloue la bière a un chancre au nez et porte un bandeau perpétuel. (*ŒC*, II, 852)

さらに言えば、第一部第 6 章のフランセ・ダルジェリとアラブ人との浜辺での喧嘩も、見聞をもとにしているのではなかったか？　ロットマンが紹介し[14)]、トッドが詳述した[15)] ガランドーの友人たちとアラブ人たちとの浜辺での喧嘩の話をカミュがガランドーから聞いたのは、1939 年 12 月かあるいは 1940 年初めのオラン滞在時と推定されるが、ガランドーから聞いたフランセ・ダルジェリ対アラブ人という喧嘩の図式をカミュはそのまま踏襲しただけではないだろうか？　こう見てくると、ムルソーの殺人の犠牲者がアラブ人であるという設定に、アラブ人へのカミュの差別意識を見るのは正当な解釈とは思われない。

前面に現れてはいなかったが故にさまざまな解釈がなされてきたアラブ人だが、遺稿『最初の人間』では大きくその姿を現すことになる。

(2) 『最初の人間』におけるアラブ人

確かに、『最初の人間』においてアラブ人は、過去においても、さらには 1953 年の物語の現在時においても、フランス人に敵対する存在として示されている箇所がある。だが、主人公は対立しようとはしない。そればかりか、第一部第 5 章には、爆弾テロの濡れ衣を着せられ、リンチにあいそうになったアラブ人を助ける場面もある（*ŒC*, IV, 785-786）。さらに、『最初の人間』では、4 人のアラブ人が名付けられることとなる。サイド同様樽工場に働くアブデル (*ŒC*, IV, 817) と隣人のタエール氏 (*ŒC*, IV, 882) それにサン＝タポートルの農園の番人だったタムザル (*ŒC*, IV, 852) は、作品世界でさほど光彩を放っているわけではない。しかしながら、第一部第 1 章に登場する案内人カドゥールは、情愛深い人間として描かれている。この件については、後で問題としたい。

さらに、よく引用される箇所だが、フランセ・ダルジェリとアラブ人との関係について、カミュは作中人物ヴェイヤールに次のように語らせてもいる。

— Et vous ?

— Oh, moi, je reste, et jusqu'au bout. Quoi qu'il arrive, je resterai. J'ai envoyé ma famille à Alger et je crèverai ici. On ne comprend pas ça à Paris. À part nous, vous savez ceux qui sont seuls à pouvoir le comprendre.

— Les Arabes.

— Tout juste. On est fait pour s'entendre. Aussi bêtes et brutes que nous, mais le même sang d'homme. On va encore un peu se tuer, se couper les couilles et se torturer un brin. Et puis on recommencera à vivre entre hommes. C'est le pays qui veut ça. [...] (*ŒC*, IV, 851-852)

このように、作中人物ヴェイヤールの口を借りて、フランセ・ダルジェリとアラブ人との共存の必要性が説かれている。またこの点で、『最初の人間』の中で「フランス人」と「アラブ人」とが並置され用いられている例が多いとのジャニーヴ・ゲランの指摘は示唆に富む [16]。

しかし、今回のテーマとの関係で、なによりも重要なのは第一部第 1 章である。第一部第 1 章は、きわめて特異な章だ。まず、執筆時期だが、第一部第 1 章のみ 1959 年春に書かれ、残りは 11 月 15 日からクリスマスまでに一気呵成に書かれたと推測される [17]。だが、第一部第 1 章の特異性は執筆時期だけではない。

第一部第 2 章以降では、語り手の現在時は 1953 年、40 歳の主人公ジャック・コ

ルムリの現在時に過去が流入するかたちで物語は展開するのだが、第一部第 1 章では、主人公の誕生以前の出来事が記され、ついで主人公が記憶にとどめることのできぬ誕生の光景が描写されている。出版直後から言われているように、主人公の誕生の場面は、「キリストの降誕」« Nativité » を思わせるものがあり、聖書的なイメージが付与されてもいる。『最初の人間』が自伝的色彩の強い作品だとしても、この第一部第 1 章は、純然たる想像の産物に他ならない。

第一部第 1 章はこのような特異性を備えているが、『最初の人間』におけるアラブ人を考察するうえで、見逃してはならぬものが二つある。

まず指摘したいのは、ジャックの父とカドゥールを描いた二つの場面だ。一つは、出産の手助けに息子の嫁を呼んでくるようにカドゥールに頼んだ後、ジャックの父はヨーロッパ式に友情の手を差し出すのだが、相手の方はと言えば、差し出された手にアラブ式に指の先で触れ、その指を口元に運ぶ場面である。この二人の仕種から、それぞれ相手に対する親愛の情を感じ取ることができるだろう。

> L'homme regarda le vieil Arabe immobile sous la pluie fine, et qui lui souriait sous ses moustaches mouillées. Lui ne souriait toujours pas mais il le regardait de ses yeux clairs et attentifs. Puis il lui tendit la main que l'autre prit, à l'arabe, du bout de ses doigts qu'il porta ensuite à la bouche. (*ŒC*, IV, 746)

もう一つの場面は、ジャックが生れ落ちた後、外に出た父が、カドゥールから外套代わりの袋の端を差し出される場面だ。

> Sous la vigne, l'Arabe, toujours couvert de son sac, attendait. Il regarda Cormery qui ne lui dit rien. « Tiens », dit l'Arabe, et il tendit un bout de son sac. Cormery s'abrita. Il sentait l'épaule du vieil Arabe et l'odeur de fumée qui se dégageait de ses vêtements, et la pluie qui tombait sur le sac au-dessus de leurs deux têtes. « C'est un garçon, dit-il sans regarder son compagnon. — Dieu soit loué, répondit l'Arabe. Tu es un chef. » (*ŒC*, IV, 750)

アラブ人が差し出した外套代わりの「同じ一つの袋の下で身を寄せ合い」« serrés sous le même sac » (*ŒC*, IV, 750)、雨つゆをしのぐジャックの父（フランセ・ダルジェリ）とアラブ人。このシーンには、友愛と貧しさの中での共存とが象徴的に描かれていると言えよう。

今一つ見逃してはならぬものは、ジャックの誕生の場面だ。この場面には、アラブ人に対する深い思いが象徴的に盛り込まれているように思われる。ジャックは医者が来る前に、二人の女性の手によってこの世界に生まれ落ちたのであった。一人は、「マダム・ジャック農協食堂」 (*ŒC*, IV, 746) の経営者、主人公はそこからジャックと命名されることになる。この女性については、作品中では、「ヨーロッパ人」« une Européenne » (*ŒC*, IV, 747)としか示されてはいないが、「フランセ・ダルジェリは雑種の種族である」«Les Français d'Algérie sont une race bâtarde [...] » (*ŒC*, III, 594) という点、さらには店の名前 (« Cantine agricole Mme Jacques ») からも、フランセーズ・ダルジェリ（アルジェリアのフランス人）と考えられる。今一人は、アラブ人であるカドゥールの息子の嫁（アラブ人）[18] である。

すでに触れたように、この誕生の場面は純然たる想像の産物であり、フランセーズ・ダルジェリとアラブ人との協力によって生まれるというこの設定には、フランセ・ダルジェリとアラブ人との共存の申し子としてジャックを提示しようとする意図が隠されてはいないだろうか？　すなわち、このような設定に、フランセ・ダルジェリとアラブ人との共存を願うカミュの夢が見て取れないだろうか？　自伝的色彩の強い作品にあって、自伝的な部分ではないだけに、それだけアラブ人との友愛、アラブ人との共存へのカミュの夢を感じ取ることができよう。

(3) 『最初の人間』の今後の展開におけるアラブ人

物語は、ジャック 14 歳、リセ時代の途中で終わっている。今後の展開については、『手帖 3』(1989) や『最初の人間』の刊行時(1994) に巻末に付された「紙片」や「ノートとプラン」すなわち「黄色い手帖」、さらには新プレイヤッド版(2008) に付された「青い手帖」や「『最初の人間』のための分類資料・メモ」から、作品は「バカロレア」「病気」へと書き進められ、ついで恋愛、アルジェリアでの政治活動、共産党問題、レジスタンス、アルジェリア問題等々へとストーリーが展開されていく予定だったことがわかる。ここでは、本論との関係で、二つの点に注目したい。

一つは、主人公と「友愛」« fraternité » の絆で結ばれるアラブ人が、カミュの作品にあっては初めて描かれる予定だったことだ。

> Rencontre avec l'Arabe à Saint-Étienne. Et <u>cette fraternité</u> des deux exilés en France.
>
> (*ŒC*, IV, 922)

このアラブ人の名前は、サドックだと考えて間違いあるまい。1955 年の『手帖』には、サドックに関する以下の記述がある。

Premier Homme. L'ami Saddok
1) Jeune militant ― Mon camarade ― crise de 36
2) Ami […] (*ŒC*, IV, 1236)

執筆に際し、『手帖』を読み返したカミュは、ほぼ同様のかたちで書き写し、「『最初の人間』のための分類資料・メモ」に残すことになる。

Saddok 1) Jeune militant. Mon camarade. Crise de 36.
2) Mon ami désormais. […] (*ŒC*, IV, 953)

『手帖』に一旦取られたメモを微修正のうえ「『最初の人間』のための分類資料・メモ」に残していることから、今後の展開の中で、「友人」« ami » としてサドックを描こうとしていたことは間違いない。二人の間には、先の引用文にもあげたように「友愛」« fraternité » が成立するが、「お前は俺の兄弟だ」« Toi tu es mon frère » (*ŒC*, IV, 923) とサドックがジャックに言うメモは示唆に富んでいる。この件については、後でまた問題としたい。

今一つ注目したい点は、結末のつけ方の一つとして、貧しいフランセ・ダルジェリとアラブ人との共存への訴えかけを示そうとしていた点だ。よく引用される断章だがあげておく。

Fin.

Rendez la terre, la terre qui n'est à personne. Rendez la terre qui n'est ni à vendre ni à acheter (oui et le Christ n'a jamais débarqué en Algérie puisque même les moines y avaient propriété et concessions).

Et il s'écria, regardant sa mère, et puis les autres :

« Rendez la terre. Donnez toute la terre aux pauvres, à ceux qui n'ont rien et qui sont si pauvres qu'ils n'ont même jamais désiré avoir et posséder, à ceux qui sont comme elle dans ce pays, l'immense troupe des misérables, la plupart arabes, et quelques-uns français et qui vivent ou survivent ici par obstination et endurance, dans le seul honneur qui vaille au monde, celui des pauvres, donnez-leur la terre comme on donne

ce qui est sacré à ceux qui sont sacrés et moi alors, pauvre à nouveau, et enfin, jeté dans le pire exil à la pointe du monde je sourirai et mourrai content sachant que sont enfin réunis sous le soleil de ma naissance la terre que j'ai tant aimée et ceux et celle que j'ai révérés.»

(Alors le grand anonymat deviendra fécond et il me recouvrira aussi — Je reviendrai dans ce pays.) (*ŒC*, IV, 944-945)

ところで、この共存への訴えかけの場面に母が存在し、母が貧者の象徴として提示されているのは興味深い。

結末のつけ方については、定まってはいなかったようだが、残されたメモの中でもっとも多く見受けられるのが、母への告白である[19)]。では、なぜ、そして何を母に告白する必要があるのだろうか？　それは、母の住む貧者の世界を意識的に捨て、母には理解不能の世界に分け入った後ろめたさの告白であり、その目的は母に許しを求めることに他ならない。一例をあげておこう。

Il avait été le roi de la vie, couronné de dons, éclatant de désirs, de force, de joie et c'était de tout cela qu'il venait lui demander pardon à elle qui avait été l'esclave soumise des jours et de la vie, qui ne savait rien, n'avait rien désiré ni osé désirer et qui pourtant avait gardé intacte une vérité qu'il avait perdue et qui seule justifiait qu'on vive.

[…]

Ô mère, ô tendre, enfant chérie, plus grande que mon temps, plus grande que l'histoire qui te soumettait à elle, plus vraie que tout ce que j'ai aimé en ce monde, ô mère pardonne ton fils d'avoir fui la nuit de ta vérité.[20)] (*ŒC*, IV, 920)

さらに、すでに触れたように、冒頭部は「キリストの降誕」を想わせるものがあり、産褥となる「マットレスからは湿った馬の毛の匂いが漂って」(*ŒC*, IV, 745) くる。したがって、母にはマリアのイメージが付与されてもいるのである。こうした点で、ジャックの賞授与式の日に、母が「聖母マリアを彫った金の小さなメダル」(*ŒC*, IV, 894) をつけているのも、単なる偶然ではあるまい。

ところで、聖母マリアは、生きている者たちと神との「仲介者」« intercesseur » と考えられてきた。『最初の人間』には「仲介者：カミュ未亡人」« Intercesseur : Vve Camus » (*ŒC*, IV, 741) という謎めいた献辞が添えられているが、マリアのイメージ

を付与され、「ジャックが失ってしまった一つの真実、ただそれだけが生きるのを正当化する一つの真実」を具現する母は、「一つの真実」« une vérité » のまさしく「仲介者」となっているのである。

そればかりではない。今回のテーマで特に強調したいのは、第三者の「母の代理」としての役割である。すでに『ペスト』において、タルーはリウーの母の内に自らの母を見ていた[21)]。つまり、リウーの母はタルーにとって「母の代理」となっていたのだが、『最初の人間』では、アラブ人サドックはジャックの母の内に自らの母を見る。つまり、ジャックの母は、サドックの「母の代理」ともなるのである。

> Dernière conversation avec Saddok quand J. est déjà contre le terrorisme. Mais il accueille S., le droit d'asile étant sacré. Chez sa mère. Leur conversation a lieu devant sa mère. À la fin, « Regarde », dit J. en montrant sa mère. Saddok se lève, va vers la mère, la main sur le cœur, pour embrasser sa mère en s'inclinant à l'arabe. Or J. ne lui a jamais vu faire ce geste car il était francisé. « Elle est ma mère, dit-il. La mienne est morte. Je l'aime et la respecte comme si elle était ma mère. »
>
> (Elle est tombée *à cause* d'un attentat. Elle est mal.) (*ŒC*, IV, 922-923)

こうしてジャックの母は、アラブ人であるサドックの「母」ともなる。したがって、すでにあげたように、サドックにとってジャックは、文字どおり « mon frère » となるのである。このように母は、フランセ・ダルジェリとアラブ人とを結ぶ存在ともなるのである。

少々大胆な見解を述べてみたい。先ほど分析した、サドックの「母の代理」としての役割から、カミュが意図したにせよ、しなかったにせよ、「仲介者：カミュ未亡人」という献辞からもう一つの意味が浮びあがってくるように思われる。すなわち、主人公（＝フランセ・ダルジェリ）とアラブ人との象徴的な「仲介者」としての母のイメージである。残されたメモに認められる、友愛の絆という母のこのイメージからも、『最初の人間』という虚構作品の中で、共存への夢を実現させようとしたカミュの思いを読み解くことができるのでないだろうか？

(4) アラブ人との共存の希求

1954 年 11 月 1 日、アルジェリア戦争が勃発する。フランスからの独立を主張する側にもアルジェリア支配を維持しようとする側にも、カミュは与することができない。泥沼化する戦争状態の中、カミュは双方の融和をはかろうとする。1955 年 7

月から 56 年 1 月にかけて、カミュは「エクスプレス」誌に 13 のアルジェリア問題に関する論説を寄稿し、連邦政体によるアラブ人との共存を訴える。さらには、1956 年 1 月 22 日、アルジェで直接「アルジェリアにおける市民休戦への呼びかけ」を行う。だが、双方の陣営から黙殺されてしまう。1958 年 6 月、「エクスプレス」誌に発表していた論説 8 編を含む、『時事論集第三巻 ― アルジェリアの記録』を世に問う。その最後に据えられている、「おそらくは 1958 年 1 月に書かれ」(*ŒC*, IV, 1451) た「アルジェリア 1958 年」は、連邦政体によるアラブ人との共存を再度主張した後、次の言葉で結ばれている。

> C'est le dernier avertissement que puisse formuler, avant de se taire à nouveau, un écrivain voué, depuis vingt ans, au service de l'Algérie. (*ŒC*, IV, 394)

このようにこれが「最後の警告」だとしている。なぜなのだろうか？　アラブ人との共存を主張しつつも、それがいかに不可能なものか、いかに絶望的な希求なのか、カミュは認識していたのではなかろうか？

たとえば、時間的には少し遡るが、1957 年 10 月 1 日の『手帖』には、次のような記述がある。

> [G.T.] Me montre aussi les rédactions de 30 élèves arabes de 11 à 12 ans auxquels l'instituteur arabe a donné le sujet : « Que feriez-vous si vous étiez invisibles? » : Tous prennent des armes et tuent soit les Français, soit des paras soit les chefs du gouvernement. Je désespère de l'avenir. (*ŒC*, IV, 1266)

このことを 3 週間後にジャン・グルニエに語っていることからも [22]、このアラブ人の子供たちの答えが、カミュにいかに衝撃的だったかが窺える。それゆえに、論説として共存をきっぱりと主張した後は口をつぐみ、「小説の喚起力」[23] に訴えかけ、虚構作品の中で共存の夢を実現させようとしたのではなかろうか？

言うまでもなく、『最初の人間』は自伝ではない。主人公の名前は、アルベール・カミュではなく、ジャック・コルムリであり、小説は三人称で書かれている。その他にも、この遺稿には、事実とは異なる事柄が導入されている。たとえば、主人公ジャック・コルムリは父の墓参を 40 歳で行う設定になっているのだが、ところが実際にカミュが父の眠るサン＝ブリューの墓地に赴いたのは、1953 年ではなく、1947 年夏のことなのである。この伝記的事実のすりかえに、あくまでも 1953 年、40 歳

という『最初の人間』の着想を得た年へのカミュの強い拘りを見て取ることができた[24)]。

だが、事実の改変の導入はそればかりではなかった。残された遺稿にある父とカドゥールとの友愛の場面や共存の申し子としての誕生の場面だけではなく、残されたメモからも、アラブ人との友愛、さらにはアラブ人との共存の象徴的な「仲介者」としての母という事実に反する事柄の導入がはかられてもいたわけだ。この事実の改変からは、アルジェリアの地でアラブ人との共存を、いかなる具体的な政治形態も示されてはいないが故にそれだけますます絶望的に共存を希求する、誠実な一人のフランセ・ダルジェリの姿が浮かびあがってくるのである。

注

本稿は、拙著『アルベール・カミュの遺稿 *Le Premier Homme* 研究』（駿河台出版社、1999）をベースに、その後の新資料、たとえば新プレイヤッド版の第 4 巻(2008) に付された資料、さらにはその後の研究成果をふまえつつ、「カミュ、フランセ・ダルジェリ ― 『最初の人間』にみるアラブ人との共存の夢 ―」というテーマでまとめようとする試みである。

アルベール・カミュの作品を以下のように略記し、本文中に直接ページを示す。

ŒC, I　Albert CAMUS, *Œuvres complètes*, tome I, 1931-1944, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2006.

ŒC, II　Albert CAMUS, *Œuvres complètes*, tome II, 1944-1948, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2006.

ŒC, III　Albert CAMUS, *Œuvres complètes*, tome III, 1949-1956, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2008.

ŒC, IV　Albert CAMUS, *Œuvres complètes*, tome IV, 1957-1959, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2008.

なお、引用文中の下線はすべて松本による。また、邦訳のあるものについては、それを参照させていただいたことをお断りしておく。

1) « Il faut attendre 1943, avec les *Lettres à un ami allemand*, pour que Camus reconnaisse en la France sa patrie ― une patrie digne d'être aimée et défendue. Jusque-là, à l'encontre de l'enseignement qu'il a dû recevoir de l'école républicaine, la patrie n'a chez lui aucune connotation historique ni nationale. »　(Philippe VANNEY, « **PATRIE** » in

Dictionnaire Albert Camus dirigé par Jeanyves GUÉRIN, Robert Laffont, 2009, p.652.)

2) この点について、「イタリア語版への序文」でも、「われわれ」« nous » と言う時、「フランス人」だけではなく「ヨーロッパ人」を指すこともあると述べている。*ŒC*, II, 7 参照。

3) フィリップ・ヴァネは次のように指摘する。« Le passage d'une guerre purement étatique à une guerre populaire permet de retrouver le vrai sens de la patrie fondée sur la lutte en commun des hommes contre ce qui les annihile. Aussi, cette patrie, animée par la solidarité des individus et non pas manipulée par les gouvernements, ne se trouve pas en contradiction avec elle-même si elle s'ouvre vers l'Europe [...] » (Philippe VANNEY, « Ce Long Détour », *Études camusiennes 2*, Section japonaise de la Société des Études camusiennes, Seizansha, 1996, p.70.)

4) 1956 年 1 月 10 日「エクスプレス誌」に寄せた論説「一般市民への休戦」の中に、アルジェリアを「私の国」とする記述がある。« J'ai choisi mon pays, j'ai choisi l'Algérie de la justice […] » (*ŒC*, IV, 368)

5) D'après une note de Claire PAULHAN dans Jean GRENIER, *Carnets 1944-1971*, Seghers, 1991, p.239.

6) Franck JOTTERAND, « Entretien avec Albert Camus », *la Gazette de Lausanne*, 27-28 mars 1954, p.9, Lausanne.

7) *Bulletin d'information*, N°33, Société des Études camusiennes, mai 1994, p.16.

8) 『最初の人間』においても、母は « mourir » を使っているが(*ŒC*, IV, 755 参照)、これは、父の戦死を告げに来た市長の言った言葉と一致している(*ŒC*, IV, 782 参照)。

9) « Et le père de Jacques tué à la Marne » (*ŒC*, IV, 941) という「黄色い手帖」のメモや « Henri est mort. Il a été tué » (*ŒC*, IV, 783) と祖母が母に父の死を告げるくだりなどは、普通に解釈してよいだろう。

10) 40 歳になって初めて父の墓に参り、父の死んだ年齢を知ったジャックは、父を「不当に暗殺された子供」« l'enfant injustement assassiné » (*ŒC*, IV, 754) になぞらえるのであり、この言葉からも、フランスに対する帰属意識がないことがはっきりと見てとれよう。

11) Conor Cruise O'BRIEN, *Albert Camus*, Traduit par Sylvie DREYFUS, Seghers, 1970, p.35 参照。

12) この件に関しては、拙稿、「『異邦人』の＜小柄な機械人形＞について」、『広島女学院大学論集』、通巻第 37 集、1987、pp.263-277 ならびに「『ペスト』の＜オト

ン氏の息子＞について」、『広島大学文学部紀要』、第 52 巻、1992、pp.214-226 を参照されたい。

13) Pierre-Georges CASTEX, *Albert Camus et « L'Étranger »*, José Corti, 1965, p.19 参照。

14) Herbert R.LOTTMAN, *Albert Camus*, Traduit de l'américain par Marianne VÉRON, Seuil, 1978, pp.224-225 参照。

15) Olivier TODD, *Albert Camus*, *Une Vie*, Gallimard, 1996, pp.230-232 参照。

16) « A diverses reprises, il [=le narrateur] associe avec insistance les adjectifs « français et arabes » ou « arabes et français », comme si, en donnant les preuves d'une introuvable « fraternité » (p.278), il voulait conjurer l'issue, inéluctable et à ses yeux inacceptable, du conflit.» (Jeanyves GUÉRIN, « Des *Chroniques algériennes* au *Premier Homme* », *Esprit*, mai 1995, p.13.

17) 拙稿、「*Le Premier Homme* の形成過程」、『広島大学フランス文学研究』、N°16、広島大学フランス文学研究会、1997、pp.20-21 参照。

18) « femme arabe » という言葉が 4 度用いられ、息子の嫁もまたアラブ人であることが強調されている。*ŒC*, IV, 749-750 参照。また、本論で取りあげるた第一部第 1 章の場面について、アニィエス・スピケルとピエール＝ルイ・レーは次のように指摘する。« Le premier chapitre relaie, sur le mode utopique, la revendication d'une Algérie pluri-ethnique, que Camus désespère de voir aboutir. On y voit en effet Arabes et Européens fraterniser au moment de la naissance de Jacques : autour de Lucie Cormery qui vient d'accoucher, la patronne (blanche) de la cantine et une femme arabe (IV, 749); dehors, Henri Cormery et un vieil Arabe, sous le même sac qui les abrite de la pluie (750); dans cette Nativité harmonieuse qui ouvre le roman, Camus redit son rêve impossible. » (Agnès SPIQUEL, « *Le Premier homme*, Cent-trente ans de l'histoire de l'Algérie », *Revue des Lettres Modernes*, *Albert Camus*, N°22, 2009, p.121.) « La scène de la naissance de Jacques, que n'étaie aucun souvenir personnel de Camus, a une forte valeur symbolique. L'Arabe qui conduit la carriole jusqu'à la ferme entretient avec le père de Jacques des rapports respectueux, dignes, mais d'un caractère quai féodal. Il est celui qui, connaissant les lieux, permettra la venue au monde de Jacques. Celui-ci, à qui ses initiales « J.C. » confèrent un caractère christique, naît entre une femme européenne (la cantinière) et une femme arabe. Cette scène de nativité apparaît comme une promesse. » (Pierre-Louis REY, « Les « Arabes » dans l'œuvre de Camus », *Études camusiennes,* N°10, Section japonaise de la Société des Études camusiennes, Seizansha, 2011, p.66.)

19) *ŒC*, IV, 937, 939, 943-944, 950 参照。

20) *ŒC*, IV, 943-944 も参照。許しを与える者としての母は、キリストに擬せられている。« Sa mère *est* le Christ. » (*ŒC*, IV, 925)

21) リウーの母について記した「タルーの手帖」の結びは次のようなものだった。« Ma mère était ainsi, j'aimais en elle le même effacement et c'est elle que j'ai toujours voulu rejoindre. »(*ŒC*, II, 225)

22) Jean GRENIER, *op.cit.*, pp.242-243 参照。

23) Agnès SPIQUEL, *op.cit*., p.115. また、ジャニーヴ・ゲランは次のように指摘する。« Le silence et les ricanements qui ont accueilli *Chroniques algériennes* ont blessé Camus. Jamais il n'a eu autant le sentiment de parler dans le vide. […] Une nouvelle fois, il choisit de répondre à ses détracteurs par une fiction, qui dialogise sa voix. »(Jeanyves GUÉRIN, *op. cit.*, p.6.)

24) 詳しくは、拙稿、「カミュのターニングポイント ― 1953 年 40 歳 ―」、『広島大学フランス文学研究』、N°24、広島大学フランス文学研究会、2005、pp.421-423 を参照されたい。

Camus, un Français d'Algérie

― le rêve de la coexistence avec les Arabes dans *Le Premier Homme* ―

Yosei MTSUMOTO

Certes, il se trouve, dans le passé ainsi que dans le présent du récit du *Premier Homme*, des passages où les Arabes sont présentés comme des êtres hostiles aux Français. Mais le héros Jacques n'a pas l'intention de s'opposer à eux. En outre, il y a une scène où le protagoniste sauve d'un lynchage un Arabe, accusé à tort de l'explosion d'une bombe, et également une autre où, par la bouche d'un des personnages Français d'Algérie, est exprimée la nécessité de la coexistence avec les Arabes.

Cependant, c'est le premier chapitre de la première partie qui reste le plus important avec la scène de fraternité entre le père de Jacques et Kaddour, et celle de la naissance de Jacques symbolisant la coexistence entre les deux peuples. Le premier chapitre étant une partie d'exception dans cet ouvrage autobiographique, on peut d'autant plus y sentir le rêve de Camus d'une coexistence fraternelle avec les Arabes.

Quant au déroulement ultérieur, il est à remarquer que Camus a laissé les notes sur la fraternité entre Jacques et Saddok et celles sur le rôle de la mère comme intercesseur symbolique entre eux.

Ainsi, à travers ces changements voulus des faits biographiques, nous pouvons lire chez Camus l'intention de réaliser son rêve de la coexistence avec les Arabes dans son livre de fiction, *Le Premier Homme*.